

關中生活を送る顏之推

宇都宮清吉

一

顏之推はその人生回顧の作である觀我生賦の末尾で、

予一生而三化、備荼苦而蓼辛

と詠い、後には諦觀に滿ちたとも言うべき數句を連ねたのみで完結している。そして、この句の下に挿んだ自注では、

在揚都、值侯景殺簡文而篡位（五五一）、於江陵逢孝元覆滅（五五四）、至此（齊亡五七七）而三爲亡國之人。

と述べている。これは誠に自嘲的とも絶望的とも言える言葉であろう。彼は梁武帝の中大通三年（五三一）に生れ、隋文帝の開皇十一年（五九一）頃に没したと思われるので（拙稿、北齊書文苑傳内顏之推傳の）一節について、名大論集史學14）、北齊が亡びた時（五七

七）は、その壯年の末期凡そ四十六才の時に當っている。

又彼が北齊朝下の人となったのは、觀我生賦内の自注や本傳の記事から推測すれば、丙子の年（五五六）或はその明年初頭のことだったらしいので（前掲）、凡そ廿五、六才の

年に當る。かくて彼が北齊朝下で活躍したのは、その青壯年期の廿年間であつたが、彼が北齊王朝に對して、否一般に六朝士大夫の一人として、凡そ王朝政權なるものに對して、どのような評價と態度を執っていたかは、別に究明を要する一つの問題ではあるが、とにかく彼がその青壯年期の全精力をかたむけて、北齊王朝下において公的活躍に捧げつくしたことは、觀我生賦や本傳に明らかである。彼が多大的感慨をこめて、その人生回顧の歌、觀我生賦を作つたのは、前掲の句とその自注からも推察されるように、彼

の渾身の活動の場だった北齊朝が亡び、心ならずも關中に移住しなければならなくなった直後の、失意のどん底の時代のことである。従つてその作意は寧ろ北齊時代或はそれ以前の時期の意欲に滿ちた活躍の履歷を語るにあつたのではなく、反對に、正に始まらんとしていた不滿不快な關中生活に對する(拙稿)、彼の心の準備を述べたものであると考えてよい。一口に言えば、それは「失意の歌」とも言えるものであるだろう。

二

顏氏家訓は、彼がこのような心境にある時代にも猶、書き續けられていた。それは彼の現實に對する失意とは全く無關係に、彼が六朝士大夫の一人として抱懷し續けていた、政治・社會・學問・倫理・藝術・宗教と言つたような人間活動の諸分野における、あるべき人間像を確乎として把持していたからである。しかし、それにも關らず、少しく細やかに家訓を讀むと、凡そ關中時代に執筆されたことが明らかに裏づけられる條々には、確かに一つの特異な色彩が出てゐることが見られるのである。そして、この色彩

は家訓を讀む者が、不知不識の間に感づかされる、極めて強いものであるとも言ふことが出来る。この特異な色彩はやはり、彼の失意の心境とは決して無關係なものではないであろう。それを私は次のように指摘すれば適切ではないかと想ふ。

生活において、一般に現實的な困惑が露呈されている。人生を退場しようとする人の暗鬱で退隱的な氣分が濃厚である。絶望に近い氣持ちの人でなければ、容易に發想し得ないようなユーモアがある。身邊には知友に乏しく、孤影蕭然たる姿が想見される。そうして、そのような孤獨のみが求める、靈魂の救済と安らぎの世界への傾斜が強く見られる。今、右に述べたような諸點について一つ一つ點検して見ようと思ふ。

三

生活において現實的な困惑が露呈されている條々とは、次に引く例などである。

鄴平之後、見徒入關。思魯嘗謂吾曰、「朝無祿位、家無積財、當肆筋力、以申供養。每被課篤、勤勞經史、未知

爲子可得安乎？」吾命之曰、「子當以養爲心、父當以學爲教。使汝棄學尙財、豐吾衣食、食之安得甘？衣之安得暖？若務先王之遺、紹家世之業、蕪羹糲褐、我自欲之。」

これは彼の一家が北齊滅亡後（五七七）、半強制的に關中移住を命ぜられ、心ならずも始められた關中生活の直後のものであろう。彼は最後まで周軍に抵抗する姿勢を執つたのだから（傳、賦）、關中移住後も北周朝から官職を得て、生活の保證とすることは望むべくもなかったし、彼自身も恐らく望むところではなかったのである（前掲）。もつとも本傳によれば北周の大象末（五八〇）に御史上士に任ぜられた旨が記るされているが、周隋鼎革の進行しつつある混亂の際のことである。その任官の確實性などは保證の限りではない。それかあらぬか、隋書の傳えるところでは、開皇二年（五八二）になつても猶、彼の肩書は齊黃門侍郎なのである（隋書音樂志、中、卷十四）。恐らく彼は入關當初の數年間は、殆ど官職らしい官職にもついていなかったと思われる。だから當時彼の一家には、衣食にも窮した情況が存在したとしても不思議ではない。彼の長男思魯は、かかる上は農耕勞働に専心して、一家の危急を救わねばならぬと感

じていたのである。この一條は實は、そのような生活上の困惑を問題にしたものではなく、反對に、人は否士大夫は、如何なる境遇に陥ろうとも、學問の研讀を怠るべきでなく、人たる者の父も、人たる者の子も、人たる道を究めるためにこそその衣食だから、衣食はたとえ充分でなくても、先ず人の父として、人の子として立つための學問をしようではないかと言ふ激しい心情を吐露した一條なのである。にも関わらず、そこには明らかに、生活の現實の困惑が明々白々に現わされている。彼の現實の生活上の困惑は、關中生活においては、最早終生のものだった。終制篇で彼は、父母の墳墓の改修を希望しながら、それが實現困難な事情を訴えて、

今雖混一、家道罄窮、何由辦此奉營資費？

と言つている。誠に家計窮乏は顔家にとつては、すでに恒久的状態だったのである。終制篇と言へば、この篇も勿論彼の關中生活の末期、殆ど死の直前に書かれたもの、私がかつて彼の没年を論じて、この點に觸れたことがある（前掲）。終制篇とは紛れもない彼の遺言の書であり、全體は暗鬱を極めた色調でぬりこめられている。その概略は、將

に人生を退場せんとするに當つて、波瀾萬丈だった一生を回顧しつつ、現在の蕭條たる身邊の状況と、不本意ながら續けられている關中生活の理由などを述べ、葬儀と墓制の點に就いて細々と記述しているものである。

このような暗鬱の氣にぬりこめられていくわけではないが、次の一條も又壯年活氣に満ちた時期を越えて、漸く初老期に入つて行こうとする人らしい發言であらう。

仕官稱泰、不過處在中品。前望五十人、後顧五十人、足以免恥辱、無傾危也。高此者便當罷謝、偃仰私庭。吾近爲黃門郎、已可收退。當時羈旅、懼懼謗讒、思爲此計、僅未暇爾。云々。

これは止足篇の一文だが、彼が黃門郎になつたのは、觀我生賦によれば文林館が設立された武平四年（五七三）の直後らしい。右の文中で「吾近爲黃門郎」と言つてゐるのは、疑いもなく北齊末期のことを指している。だが、この一條が執筆されたのは、恐らく彼の關中移住後のことにちがいない。文中の「當時羈旅云々」と言う語は、そうした時間的な間隔を物語るものだと考えてよい。彼の北齊における生活は正に羈旅と言うには價いしたであらうが、その

關中生活は、あらゆる意味で羈旅と言うには適わしくなく、強制的な移住であつて、むしろ彼の場合に限つては、俘囚とさえ言うべき不本意のものだったのである（前掲）。

右の一條は止足と言う徳を教訓するものではあるが、同時に政治の現實に甚だしい不満感を餘儀なくされている、彼自身の立場の理論化でもあつたはずであらう。そして彼にこのような退隱の氣持ちが濃厚であれば、さらぬだに猜疑の心晴れやらぬ關中政權の方でも、彼に對する信任が生じて來るはずもなかつたわけである。隋書音樂志中（卷十四）によると、

開皇二年（五八二）齊黃門侍郎顏之推上言、「禮崩樂壞、

其來自久。今太常雅樂並用胡聲。請馮梁國舊事、考尋

古典」。高祖不從曰、「梁樂亡國之音、奈何遣我用邪？」

なる一文が見える。當時猶依然として北齊の官職名で呼ばれている顏之推である。勿論平民の扱いではないにしても、新興隋朝で彼がどのように見られていたかは想像に難くないだろう。だから、その上奏も彼としては、相當に思ひ切つたものであつたらうが、隋の文帝からは全くにべもなく、退けられてしまった恰好なのである。こんな風に扱

われては、立場上の覺悟は出來ていても、誰しも毒舌の一つも吐いて應酬したくなくなるところだろう。だが「士大夫のみだしなみ」（風操篇の語）を厳しく子孫に教訓している彼としては、そうは出來ない。してはいけないのだ。風操篇で彼は、こんな場合に役立つユーモアについて記している。

近在議曹、共平章百官秩祿。有一顯貴、當世名臣、意嫌所議過厚。齊朝有一兩士族文學之人、謂此貴曰「今日天下大同、須爲百代典式、豈得尙作關中舊意？」明公定是陶朱公大兒耳。」彼此歡笑、不以爲嫌。

この一條は明らかに隋の統一が實現した時代（五八九）以後のもので、そうだとすれば、その執筆はこれ又彼の極めて晩年のものと言うことが出来る。この當時彼は隋朝に出仕して、何かの官職にあつたらしい。それは、一つは「子孫の資蔭を作っておくため」であり、一つは「北方政教嚴切、全無隱退者」故でもあった（終制篇）。だが、この文中の議曹なる官廳で彼が如何なる資格で會議に列席していたかは全く不明である。しかし文章の感じからすれば、この官廳における會議の席上での彼は、權勢をかさにきた「顯

貴」「貴」即ちおえら方の横暴な言辭を苦々しく思いつつ、遠慮勝ちにひかえている者の姿を示していたであろう。偶々山東學士の放つたユーモアに、ホッと救われた気分となつた彼が、緊張した苦々しい場面を解放するユーモアの素晴らしい効果と價値とをひしと悟らされて、この一條の教訓を綴つたものと思われる。だがしかし、この一條を物する心境は決して唯單純に、ユーモアの功德を教訓すると言つた點に止まるものではなく、いわゆる世に時めかない地位にある人の屈折した心境でこそ、發見できる眞實があると言えらう。

四

要するに彼の關中生活は、經濟的には困惑に滿ち、政治的社會的には退隱の氣に滿ち、かたがた老は漸くにして迫つて來ていたのである。しかも身邊に肉親は少く、孤影蕭然たる孤獨も又彼を苦しめたかも知れない。彼の身邊に肉親が少なかったのは、彼が五五四年の江陵陥没以來、或は俘囚として或は亡命者として、そして又少くも彼の主觀的な氣持ちでは、俘囚に近い強制移住者として、當時の中國

の東西南北を轉々流浪していたからである。關中には、すでにして五五四・五年以來兄の顔之儀が存在していたけれども、この兄とは殆ど何の交渉もなかった如く、何も記してはいない、又他に記載した資料も残ってはいない。その上之儀その人は周朝においては重用されたが、隋文帝からはその禪讓問題をめぐって、非常な不興を被り幸いにして處刑こそ免れたけれども、之推が關中生活を始めて漸く落ちついた頃には、之儀は或は遠郡の太守として、又邊境州の刺史として長安にはいなかった。開皇六年（五八六）に退官したけれども、傳記の本文からすれば開皇十年（五九〇）までは、やはり長安にはいなかったと見られる。そして十一年（五九一）には没している（北周書顏之儀傳）。恐らく之推は唯一の現在の兄とも、親しい交渉を生ずる機會を持たなかったと見るのが正しいようである。肉親との交歡がなかったことは、確かに彼の生活を寂涼たるものにしていただであらう。だが、それ以上に彼を孤獨の苦しみに陥れたと思われるのは、この時期に彼は殆ど交友と言うべきものを喪失していたと見られる點である。彼の傳を見ても、家訓を検しても、従來の舊友との交友は殆ど停止していると思

われるのみならず、彼が關中生活の中で新に得たと見られる友の名は、一名も發見出来ない。家訓の中に出て来る彼の同時代人は、全部北齊生活とそれ以前の時代の人々に限られている。彼の關中生活は四十六才から略六十一才の初めにわたっている。この十五年間は、北齊時代の廿年間、江陵時代の大體出生以來の略廿五年間（江州にも、しばらくはいたであろう）に比べて、必ずしも甚だしく短かいとは言えないであろう。それにも關らず、この期間において彼が唯一人の新しい友人も、この地の生活において見出し得なかったと言うことは、この期間における彼の生活が、どのようなものであったかを推測する場合、重要なデータと言えないだろうか。

五

そもそも彼は幼い時代から、甚だしく交友の生活に悦びを見出している人であった。序致篇に、彼は少年時代の生活を回想しながら、

頗爲凡人之所陶染、肆欲輕言、不脩邊幅。

と言っている。又本傳の一句には、

好飲酒、多任縱、不修邊幅、時論以此少之。

ともある。風儀のよくない貴族少年の群に混って飲酒高談しつつ、世論の非難をあびるほどの無頼の生活を送っていたことへの悔恨であるが、「凡人のために陶染せられる」とは、即ちその交友生活の描寫に他ならないであらう。だが彼が十八、九才を過ぎて世の荒亂期に出會すると共に、人生に對する自覺が生れるが(序致)、それ以後でも彼が交友を好む性格には根本的な變化はなかつたのである。

吾生於亂世、長於戎馬、流離播越、聞見已多。所值名賢、未嘗不心醉魂迷、向慕之也。

とは慕賢篇の一節であるが、最早や分別なき少年時代とは異つて、十九才で江陵の幕府乃至元帝の朝廷に出仕して以來は(賦内)、交友は彼にとつては、人間としての進歩を計るための媒介であつたと云つてゐるのである。かくして彼は、その到る處のすべて、居る處のすべてにおいて、多くの交友群を持つに至るのである。

六

彼の交友群は大きく言つて、江陵時代と鄴時代に分類で

きるであらう。江陵時代の交友群は主として、湘東王繹の幕府又は後にこの人が即位して梁の元帝となつた、その朝廷のサロンを中心として結成されていたと見られる。觀我生賦の中に次の句が見える。

濫充選於多士、在參戎之盛列。慙四白之調護、廁六友之談說。雖形就而心和、匪余懷不所說。

これは含羞の句、或は自己不滿の句と言うべき一節だが、實はこの句は繹のサロンのことを詠じたものではない。これは繹の第二子で世子となつた方諸が、中撫軍將軍として郢州に出鎮することになつた時、その幕府に開かれ、サロンのことを詠じたものである(賦内)。右に掲げた句下の自注に又、

時遷中撫軍外兵參軍、掌管記、與文珪・劉民英等、與世子遊處。

とあるのは、之推が中撫軍として郢州に出鎮した方諸の幕下の參軍に轉出したことを言つてゐるのであつて、之推はここで文珪・劉民英らと若冠十五才の少年將軍を中心として(賦自)、サロンの交友を行ったわけである。だが實は之推を始めとして、文珪・劉民英らも元は言うまでもな

く、繹（元帝）のサロンの交友だったと考えて差しつかえない。文珪とか劉民英のことは、他に傳えたものが見當らない如くである。しかし同じ觀我生賦の「或校石渠之文」の句下にある自注によると、江陵の宮廷圖書館で書籍を校訂整理した、周弘正・彭僧朗・王珪・戴陵・王褒・宗懷正・顏之推・劉仁英・殷不害・王孝純・鄧藎・徐報・庾信・王固・宗善業・周確と言う人々の中に見える王珪と劉仁英は、恐らく文珪と劉民英で、文は王の誤であろうし、仁は唐諱によって民を仁に代えたものであろうかと考えられる。そして、これらの宮廷書籍校訂者たちは何れも當時の錚々たる經學乃至文史の學者たちで、元帝を中心とするサロンの有力メンバーであつたろう。中でも周弘正や王褒は家訓の中にも現われて來る。王褒は周書に傳があるが、江陵陷没後關中に徙されたからである。しかし、關中で之推と交友が復活したかどうかは明らかでない。この人は書家として知られ、そうした藝術家として、家訓には二度出ている（慕賢、雜藝篇）。周弘正は陳書に見える。周易の大家で佛教々理にも通じ、玄學の頭梁でもあり、梁武帝の玄學愛好と梁末玄學再流行の中で、武帝が建康城西に建てた士林

館なる學林において、玄學愛好の學徒に講述し、その影響は廣く朝野にひろがったと言う。本來は江陵幕下の人ではなかつたが、侯景の亂後江陵の元帝の下に歸した。建康時代の活躍ぶりからもわかるように、仲々やる氣充分の人だつたらしく、王褒らと共に建康還都を策したが、江陵生えぬぎの人々の反對に出會つて失敗した。陳の太建五年（五七三）に七十九才で没したから、顏之推よりは先輩に當るが、その學問とやる氣充分と言つた強い性格は、之推の印象に強く残つたらしく、家訓では三度もその名が出て來る。一度は梁朝末期の玄學再興者として（勉學篇）、一度は經學文史の大家として（同上）、そして一度は優情な梁朝士大夫の中で、少しく氣慨ある男子として小逸話の主人公となつている（涉務篇）。弘正の弟弘讓も之推の友として風操篇に名が見えるので、やはり江陵における彼の交友群中の一人だつたのである。

彼の江陵時代は長くはあつたが、何しろ若い青年又は少年の時代のことである。その人間形成に刺戟となつたような活躍も内容こそ數奇であるとはいへ、まだ充分とは言えず、交友群も彼に影響を與える程の人は、そう多くはいな

かったであろう。先に引いた觀我生賦の句が、若干含羞の句となり、自己不滿の句となっているのも、當時を回顧する彼のいつわりない感想であるとして、差しつかえないだろう。

鄴時代は先にも言った如く、彼の活力に満ちた青年時代に當たる。そこで彼は不安定亂脈な政界の状況にもめげず、全力を盡して活躍したと思われる。勿論彼らしい周到細密な用心と、深く心の奥に秘められた勇氣とが、その活動の底に存在したことは、傳、賦、家訓の條々を通じて、充分にうかがえる。その最も著るしい例は、文林館設立の背景をなす軍人勳貴と文官たる漢人士大夫の暗闘における彼の態度であろう。しかし、ここではその問題には直接觸れる必要はない。ただ觀我生賦や北齊書文苑傳の序にもあるように、齊末文林館が設立されると、ここを主宰する顔之推を中心として、北齊朝下の俊秀が雲の如く集って一大交友群が形成されたのである。これは恐らく彼の人生の中でも、最も華々しく最も本懐の時代ではなかったか。間もなく北齊は亡びるが、その時彼と共に文林館の錚々たるメンバーだった陽休之・陸叡・盧思道・李孝貞・李徳林・辛

徳源・陸開明・元行恭その他十八名の人々は、關中に集團をなして移動することになった（北齊書陽休之傳文苑傳序參照）。この人たちは後には、それぞれ隋朝において活躍したのだが、關中時代の顔之推が、これらの人々とどれ程密接に交友を繼續したかについては、餘り記したものが無い。ただ、李徳林とは非常に密接な關係があったことについては、かつて述べた（前引）。又周法高氏の家訓彙注付録二に引かれた繆鉞氏の顔之推年譜によれば、陸法言等撰の切韻の編纂に當つては、右に述べた關中移住の北齊名士數名が之推と共に參加していることが確かめられる。だが、ここでも最早や彼は仕事の主人公ではない。法言は實に陸開明の子で、活躍の世代は一代更新した形である（隋書陸爽傳開明は字）。かくして、總じて、その人々との關係は目立たない、極めてひかえ目なものである。恐らくは殆ど交友關係を絶つに等しい状態であつただらう。

ところで彼が北齊へ脱出した當初の時代に、北齊の文學界や政界に活躍していた人に魏收がある。その十才年長の先輩に當る人に邢邵がある。そして、之推と最も密接に結ばれていた人に祖孝徵がある。何れも已に北齊末に没した

人で北齊書に傳を持つてゐるが、邢邵と魏收は邢魏とならび稱される一世の文人である。魏收は言うまでもなく北魏書の作者としても有名だが、家訓には前者は五度、後者も五度その名が見える。その回数から見ても、彼が如何にこの人々に傾倒していたかが判る。兩人は彼によつて文壇の大御所だと認められている(篇章)。梁に沈約・任昉の兩大家があつて、その優劣が定めがたい如く鄴下でも邢魏の對立があつて、その優劣は定めがたい(同上)。邢邵は沈約の崇拜者だ(同上)。又單に文章作家として秀でてゐるだけでなく、經學史學においても大家である(篇勉學)。魏收も同じく經學史學に通じ、その上大作家でもある(篇勉學)。詩の評論家としては、之推と意見を異にしてゐた(篇章)。だが交友中に相裨益する友でもあつた(書證)。これらの條々は何れも、之推との密接な交友關係の中で、彼が親ら體驗したことばかりを述べてゐるのである。邢邵も魏收もその傳記によれば、君子としては可成り破格な人々と言えよう。兩人の性格は甚だしく對照的ではあるが、しかもその奇行や醜怪とも言える言行は、彼らの強烈な個性を語つて餘りがある。非常に興味を引く人格の持ち主である、このような人々

と深く交友した之推その人の人格の幅員も、この人たちの行事を究めることで一層理解されるようになるだろう。全く同じことが、もう一人の親友祖孝徵の場合についても言える。祖孝徵は名を珽と云うが、之推は常に彼を字で呼んでゐる。その彼之推との關係は、祖珽傳や北齊書文苑傳序、觀我生賦に見えるように、友人であり且つパトロンである。家訓の中ではその名は四度現われる。君子の身だしなみを身につけた人として、よく南北の風俗に通じ、繪畫をよくし(篇風操)、文學の評價に一家言あり(篇章)、若い士大夫たちの間に人氣があつた(篇風操)。本傳によれば彼は又、極めて奇行に富んだ破格の人であり、強烈な意欲と不屈の鐵人とも言うべき策謀縱横の人である。しかし一面文學を解し繪畫をよくし、語學と音樂にも通じ、人情の機微を察して、貴族青年の間に人氣を博してもいたのである。彼が顏之推に與えた印象と影響は、決して少ないものではなかつたろう。之推が常に彼を孝徵と呼んでゐるのは、その並ならぬ敬意と傾倒とを物語るものに他ならない。

顏之推の北齊時代における生活は、以上の様に交友に恵まれて、常に俊秀の群中にあり、活氣に満ちた活動に終始

したのだと思われる。

七

ところが、毎度言つたように、一度彼が關中の人となつて後は、これらの舊友が必ずしも、全部が全部遠くに在るわけでもないと思われるのに、殆ど著るしい交友關係を持つたように見えない。たとえ幾らかの關係があつたと思われる人も、最早や當時の彼とは政治的社會的に地位の格差が大きく開いている如くである（李徳）。又共同の仕事をしたにしても、その存在は殆ど目立たない形で行われている（切韻の編纂や百官の秩録平章など）。それは言わば老境に向う失意の人の孤影蕭然たる姿であると言つてよいだろう。そうしてこのよ
うな時に當つては、誰しも現世の生活を離脱して、靈魂の救濟を求め永遠の魂の安息を欲するに至るのは當然である。ましてや、佛教はかねてから顔家の傳統の信仰であつた。かくて彼は彼一流の信仰論を彼一流の現世的論理と筆法で歸心篇の一篇に展開したのであつた。その信仰の性格と執

筆された時期のついでには、私は近く一文を草したので、こ
こには改めて精しくは再論しない（顔氏家訓歸心篇覺）。だ
が、この一篇の執筆の時代は、彼の關中生活の中でも、隋
開皇四年（五八四）から開皇十一年（五九一）に至る期間
の中期であつたろうことは、略確實である。彼の佛教信仰
への傾斜は相當に強く、時には家訓全體の基調である、儒
家的思想を否定するにも近い記述も、無いわけではない。
この故に、後世の家訓愛讀者の中には、この歸心一篇を家
訓から放逐すべしと考へた人も無いとは言ひ切れない状態
である。しかし、彼の信仰は言わば風俗的信仰に近いもの
で、知的哲學的に教理や信仰の本質に接近しようとするも
のではなかつた。ひたすら此の世に續く遠くのはてに淨
土を求めていた、當時の佛教信仰的ムードに多分に同調し
た所に信仰の基調があつたし、又このような態度で信仰生
活を論ずるところに、如何にも現實主義で實用主義的思想
と行動の履歷を持った、彼らしい特徴が現われていると思
われる次第である。（一九六七・一・一〇稿）